

高校英語学習指導における 教授初心者の留意点

檉本 英彦

A 一般的事項

1. 最も自分にふさわしい教え方を発見、開発すべきであるが、根本は生徒がよく理解し、運用力をのばし、好学力を持つように指導することである。
2. 従って単純な技術としては、皆に聞こえる声量で話す、説明の語尾をはっきりと言う、黒板はわかりやすく用いる、書いた字の前に立ちはだかたりしない、今どこをやっているのかははっきりとわかるようにして行く、わかり易い説明と同時に質問や指名を適切に行なって生徒に思考力や運用力をつけるよう指導する、等の事が大切である。
3. 生徒の英語に対する関心は高いが、理解に困難を感じる生徒が多い。この原因は基礎の理解が不十分であるか、又は誤った理解をしているかである。又日本語と英語が相互に対応して、相互に置き換えれば理解できるという初歩的な単純な考え方をそのまま・持ち続けようとする事から来る場合もある。

従って基礎文法の要点を必要に応じ、繰り返し説明すると同時に、日本語と異なる英語の特性を折にふれて説明するのがよい。

4. 「どのような質の英語を教えたらいだろうか」——これに対する答は「外国人がどのような日本語を用いたら好感を持てるか」という事を考えて見ればわかる。従って時代離れた古い話法や俗語は初級、中級の段階では教える必要はない。
5. アメリカ英語、イギリス英語のいずれか一方だけを重視し、他を軽視するのはよくない。東京弁と大阪弁では「…だ」「…や」という文の重要な部分が異なり、単語のアクセントの違っているものが多い。英米語にはこれ程大きな差はない。

英米語の表現に違いのある場合はその両方を理解させるようにしたい。この違いは生徒の負担になる程多くあるわけではない。

6. 発音、表現とも世界のどの英語国民にも理解されるものを目ざすべきであり、又どの英語国民の英語も理解できる事を目標とすべきである。
7. 例えば[ɔ]と[a]を日本語の[オ]、[ア]として説明するのは正しいだろうか。英語の音が日本語の音に還元できる筈はないし、元来[ɔ]と[a]は同じ系統の音である。

又water, little等のtを発音しないように教えるのは好ましくない。これを発音しないのは地域音になるが、発音すれば世界のすべてに通用する。

8. 発音はゆっくりであるが、正確に、かつ文の意味を表現するように発音するよう、指導する。生徒の中には時々速く読むのが上手なのだと思解している者がいる。
9. 困難な子音の発音と同様に母音の発音も重視しなければならない。[a][ʌ][æ][ə]; [ɑ:] [ə:]; [ɔ:][ou]; [e][ei]等がそれぞれ混同されるきらいがある。又二重母音の後の音を強く又は高く発音するくせがある。又語頭でない場合[g]を[ŋ]と発音する事もよく聞かれる誤りである。

日本語に用いられる英単語の発音や意味は特に注意する必要がある。

10. 基本文法を教授者自身よく理解していなければならない。時たま見られる重大な誤解の数例は——Ifでひきいられる副詞節で未来形のかわりに用いられる現在形を仮定法現在、又は仮定法未来；完了不定詞を現在完了；現在分詞を進行形；仮定法現在を原形不定詞と混同する。
11. 生徒が特に理解しにくく、又間違いを犯しやすい事項は何であろうか。この事にたえず留意してそれを発見する事は授業の質と能率を高めるであろう。例えば次のような事項は頻繁に間違える事の例である。

名詞の数と冠詞の使用、動詞の時制、複雑な述語動詞の構成、be動詞の不必要な使用、準動詞の時制、人称の使用、比較の用法、使役と人称との関係。
12. アルファベットの書き方の不正確な者が低学年に多い。生徒の板書やテストの際に訂正して正しい書き方を指導する必要がある。よく見られる間違った書き方の例は、
大文字を次の小文字と無理に続けようとして字形をくずす。M, Wの大文字の不正確。
o, w, vの小文字の最後の線を下までのばす。iの点を左又は右に長くはねて書く。
13. 生徒、又時には教授者も、板書する際に次のように二行目以下を前へ出さないで書く事があるが、これはやめるようにした方がよいのではないだろうか。

a) _____

b) _____

14. アルファベットは日本字の場合程書き順は厳格ではない。ただし縦線を先に横線やiの点をあとに、が根本的習慣である。
15. 日本語のローマ字書きには2つの式があるが、これらを正確に理解し混用しないように指導する。英語の中ではヘボン式の方が妥当である。
16. どの国語でも3000語で普通の日常会話ができ、5000語で読む文の95%の単語がカバーできると言われる。(日本語は例外で約22,000語が96%をカバーする。——金田一春彦「日本語の特質」NHK 121ページ)

B 授業の進め方一般について

1. 説明は全体に聞こえる声量でなければならない。又語尾がはっきりしないと、言った内容が「……である」のか「……でない」のかが生徒に不明瞭のまゝで、授業の効果は半減してしまうであろう。
2. 質問を述べてから指名するのと、指名してから質問するのと、どちらがよいであろうか。
3. 非人格的な指名の仕方ではなく、できるだけ名前で指名したい。
4. 質問に対し生徒が答えられない場合どうしたらよいだろうか。「わかりません」に対して「あ、そうですか」と言っていたのでは、生徒の消極的な傾向を助長するだけの結果になる。生徒が答えられない原因を判断し、適切な説明を加える。又は側面から別の質問をして正しい答に誘導する等の努力をしたい。もちろん質問を打ち切らなければならない事もある。生徒がうまく答えられない場合、次のような原因が数例として考えられる。

- a) 質問自体があいまいであった。又は無理であった。
 - b) 生徒がその問題に対処するだけの十分な知識を持っていない。
 - c) 知識があっても、それが複雑な形をとって来た場合に、主要なものと同副次的なものと同を分析できないで、どのような考え方をしたらよいかかわからない。
 - d) 似ているが全然別の事柄についての知識をあてはめようとしている。
 - e) 必要な知識を知って、それを応用展開して行く事をしないで、あてずっぽの推測にたよろうとする。
 - f) 思考が必要な段階だけ先へ進まない。常に一段階の思考で止ってしまう。
 - g) 心理的原因 —— 自分はいつも間違える、といった劣等感。
5. 生徒はしばしばあいまいな答え方をしたり、両義にとれるような答え方をすることがある。正確な考え方を助成して行くよう導きたいものであるが、これに対する対し方は上記4の場合が参考になろう。
6. 初めて出て来た事項についていきなり生徒に質問するのは無理である。又何度も出て来てすでに大多数の生徒が習得している事にくわしい説明をするのは時間の空費である。
「これらの生徒に対し、この段階ではこの事項はどのように扱うべきか」という事を常に考慮していなければならない。原則的に言える事は、
- a) 初めて出て来た事項は説明を主とし、出て来る回数を重ねるに従い、生徒への質問、それを応用した実際の練習等、生徒の活動を多くして行く。つまり、例文による説明 → 例文の生徒による解釈 → 例文の空所補充の練習 → 例文の生徒による和文英訳 → その事項を用いた英文を生徒に考え出させる — という風に進むのがその一例である。
 - b) 初めて出て来た事項も今までの知識と無関係な事として扱うより、生徒がすでに持っている知識と結びつけ、その展開として理解させる方が効果的である。
7. 生徒が質問に答えた場合、その答が正しいのか、間違っているのか、もし間違っているならどこが訂正されるべきか、をはっきり確認し、他の生徒全員に正しい答を繰り返して徹底させる必要がある。
もし答が間違っていたら、生徒の気力を沮喪させないやり方で、その間違いを生徒自身に発見させ、正しい答に誘導する工夫をしたい。
8. いつの間にか次の説明に移り、今どこをやっているのか聞く者にわかりにくいのは困る。これを明確にするよう工夫したい。
9. 時間配分に留意しなければならない。例えばあと5分しか残っていないのに、あらたな区切りを始めたり、数人の生徒を黒板に出して書かせるような事はやめたい。

C 英文和訳 (リーダー)

1. できるだけ英語を用いて授業を進めたい。しかし英語の使用は生徒の能力、又その能力の向上に対する客観的な判断にもとづいていなければならない。
2. 正しい発音による読み方を示す必要があるが、これには現在では教科書に付属したテープの使用が有効である。
個々の単語の発音は教授者自身思わぬ誤解をしている事があるから、よくたしかめておかなければならない。
3. 意味を取り正しい句切りと抑揚で読むように指導する。生徒の一部には前置詞、接続詞、

冠詞を前の語にくっつけて句切るくせの者がいる。

He said that / ~; He is able to / ~; those who / ~; French as well as / English; This is the / ~; He is taller than / his father.; He waited for / ~
上の/ の所で切るのは間違っている。これは一連の句として覚える際のまずい覚え方からも来ている。この影響は英作文の際の次のような誤りにも表われて来る。

He waited for in the room. He read as many as possible books.

4. この間違いを避けさせるためには、必ず~又はA, B(又はX, Y等)を入れて覚えるように指導し、教授者自身もこれを実行し、正しい句切りで発音するようにする事である。

wait/for~, be able/to do, A as well/as B, as many (~) as possible

又文法機能として英語の前置詞や接続詞は日本語と異なり、次の語や節に付く事をよく理解させなければならない。

5. 生徒には単語の発音を綴りを眺めて guess しようとする者がいる。辞書によれば正しい発音を知る事ができる事を理解させる必要がある。又 ou, owの綴りは90%は[au]と発音される等の綴り字と発音の関連も随時教えたい。
6. コーラスリーディングは有効な方法である。ただしコーラスリーディングにおいては、個人的くせに影響されたり、日本語風の発音のまゝで発音する生徒をどうやってチェックしてそれ正して行くかは大きな問題である。
7. 英文の理解は日本語の訳を介入させない直読直解が理想である。しかしこれは理想であって、それに至るために有効な過程を経なければならない。生徒にそれを理解させて行くのは教授上の技術である。
8. 英文を一つ一つの文の寄せ集めとしてではなく、章全体もしくはパラグラフ単位に把握しその意味を考えて行くように指導したい。英文はパラグラフ単位の思考によっている。又英文では最も大切な事はパラグラフの最初に表現されている、内容を論理的に布衍する、という英文の思考表現の傾向を教授者自身よく理解していると同時に、生徒もそのような考えにもとづいて英文に接して行くように指導したい。
9. 個々の文章の理解が困難な場合には、先ず主語と述語動詞を発見する、文の構造を合理的に分析把握する、単語の正しい意味を理解する、等の過程が必要で、教授者は生徒自身でこれを行なえるように、側面から援助誘導するのが望ましい。
10. 文章が長くなるに従い構造の分析が難しくなる。最も間違った態度は、文の構造を無視して、印象の強い単語に引きずられて、それらをたどって適当な解釈を考え出す、というやり方である。それを避けるためには例えば次のような方法が有効であろう。
- a) 文が二つ以上の等位節から成ってればそれを別ける。
 - b) 文の主語と述語動詞(準動詞と区別された定動詞——現在形又は過去形)を発見する。
 - c) 述語動詞が自動詞か他動詞か。つまり他動詞ならば目的語はどれか、を考える。
 - d) 述語動詞、目的語等で同資格で併置されているものを発見する。
 - e) 前置詞+名詞を一かたまりとしてとらえ、それが副詞的、又は形容詞的に何かを修飾している事を理解させる。この一かたまりをカッコに入れて一時保留するのも一つの方法。他の長い修飾要素についても同様である。
 - f) 関係代名詞で率いられる節は形容同節である(ただし what 等で率いられる名詞節の場合もある)事を理解し、その節をe)同様カッコで包み、その節がどの名詞を修飾しているのかを考える。
 - g) 接続詞を基準としてそれに率いられる節はどこまでか、又その節の働きは何か、を考

- える。
- h) 従って、前置詞、関係代名詞、接続詞を一つの独立した語としてとらえないで、それに続くものと一体としてとらえるようにしなければならない。
- i) 省略された語を発見し、それを補って考える。日本語と異なり、英文における省略は必ず前に出ている語であり、前に出ているのと同じ文章関係で省略が行われる、という事に留意したい。
- j) 生徒の中にはコンマですぐに思考の区切りにしてしまう者がよくある。コンマで必ずしも文章が切れているとは限らない。又コンマを手がかりにして挿入句を発見し、それをカッコに入れて一時保留したらよい場合もある。
11. リーダーの授業の目的は書いてある事の内容を理解させる事である。そのための手段として文法の説明を必要に応じて行なうのである。主客転倒して文法の説明のための授業にならないように注意する必要がある。「今はどの程度までの説明が妥当であるか」という事をいつも客観的に考えていなければならない。従って、生徒の理解が不足していると判断した場合は、予定よりもくわしく説明しなければならない場合がある。又その逆の場合もある。
12. 文法事項は抽象的にならないように出来るだけ実例で説明したい。文法用語の使用は最小限にとどめたいが、文法の基本的で中心的な事項は繰り返して徹底させたい。
- 生徒の中にはto不定詞はいつでも「～するために」、doはいつでも「する」という意味にとろうとする等の片寄った文法の運用しか出来ない者がいる。基本文法については必要にして十分な知識を持つよう指導したい。
- この基本的文法事項とは中学から高校一年までに学習する程度の事項である。
- 又教授者はこの基本的事項と、まれな例外的事項との間に軽重の判断をつけられなければならない。
13. 生徒にしばしば見られる欠点は一つの単語に一つの訳語だけで済まそうとする事である。これはその単語に関して最初に習った訳語か、辞書で最初に出ている訳語かである。このような傾向に陥らないように指導し、個々の単語の必要にして十分な、かつ正確な意味を理解させなければならない。
14. 単語の指導については次の点に留意したい。
- a) 例えば natural は「自然な」だけの訳語ではよくわからない場合がある。
1. 自然の(天然自然の) 2. 自然な(自然発生的な, 当然な) 3. 生れながらの。以上のように個々の単語の必要にして十分な訳語を理解するよう指導すると同時に、単語の意味はあくまで文の前後関係できまる事をいつも念頭におくように指導したい。
- b) expect を「期待する」と訳したとする。日本語の「期待」は良い事を予期する事であるが英語の expect は悪い事でも良い事でも「何かが起る事を予期する」事で、意味の上のズレがある。生徒は辞書の訳語からはその単語の正しい意味やニュアンスをつかめない事があるのでそれを説明解説する必要のある事が多い。
- c) 以上のような説明は例文を用いる事によってより効果的に行なう事ができる。又 rob, remind, replace, dot のように必ず例文によらなければ理解できない語もある。
- 単に rob of という不徹底な覚え方をしないよう指導したい。(C 4 参照)
- d) 単語や句にありきたりの不明瞭で、時には間違いをふくんだ訳語をつけないように留意したい。cottage 小屋(クリスマスカードに見られるような田舎の住宅), fellow passengers 同乗の乗客(同じ乗物に乗り合わせた人々) a few 二, 三の(not many, 多くない), morning 朝(午前という意味もある), 以上はわずかな例であるがカッコ内

が正しい解説である。

- e) 単語の理解と記憶は例文によるように生徒を指導したい。又あまりに大型の辞書は生徒がその中からどんな単語、又どんな意味を重視してよいかわからない事となる。高校生の学習辞典として発行されている辞書、特に例文の適切なものを使用させ、時に応じて辞書の使用法を指導する事が生徒の勉学をより効果的にする事を助けるであろう。
- f) 単語の意味を辞書でよくたしかめる事も大切であるが、未知の単語にぶつかった場合前後関係からその意味を推論する事も、これに劣らず大切である。生徒は時に文の前後の内容や意味の進展とは関係ない突飛な訳語をつける事がある。その不合理さを指摘して、意味内容の自然な発展を重視し、その単語の当然そうでなければならぬ意味を考えさせる事が重要である。

15. 直読直解が英文の把握の上で理想ではあるが、多くの文では英文和訳によってその意味をたしかめて行かなければならない。生徒のよく陥る間違いは単語を置き換える——しかも同一語数、同一品詞の単語に置き換える事によって訳文を作ろうとする事である。このやり方は初歩の段階では間にあうが次第に行き詰って来る。

以上に述べて来たようなやり方によって英文の表わす意味を発見理解し、その意味を日本語で表現するように指導したい。

16. 直訳か意識か、という事は生徒が常に問題とする事である。いわゆる意識というものが、構文を十分に理解しないで、あてずっぽ式に考え出されたものであってはならないという事を絶えず留意しなければならない。従って生徒の解釈を聞いて果して十分に構文と単語の意味を理解しているかという疑念が生じたら、直ちに構文等に関する質問を發して見るとよい。

又解釈は「日常使う普通の日本語で」という事を原則としたい。

- 17. 生徒の答には必ず確認を与えなければならないが、生徒の解釈の後には必要な訂正や批評の後で、教授者が解釈を行なう必要がある。その場合にいきなり上手な意識をしたのでは、生徒はなぜそのような訳が出て来たのか理解できない事が多い。構文と密着した直訳から途中の理解可能な過程を経て、最終的な訳に達する過程を示す必要がある。
- 18. 風物知識、英米人の物の考え方や心理の理解は教材の運用には不可欠である。ふだんの読書、写真、テレビ等によってこれを養うようにしたい。海外体験があれば一層有効である。
- 19. 以上のようにして教材内容を理解させる事が第一である。しかしさらに時間を生み出す工夫をして、文法事項、単語を応用的に運用する訓練をしたい。さらに内容について考え、出来れば英語による質問、応答、感想の発表等を行ないたい。

D 和文英訳、英作文

1. 英作文の教材にはいろんな段階や内容の違いがあり、それによって授業の内容や難易は異なって来る。

- a) 或る文法事項や語句の使用を中心としたもの。日本語は使用される事項を暗示するよな比較的単純で直訳的日本語に近い場合が多い。
- b) いわゆる日本語らしい日本語で書かれていて、どのような語や表現を使うかは訳者自身の判断によっている。中心は、内容の表現自体、又は日本的表現や発想をどのように扱うかという事である。

上のaとbの間にはいろいろの段階がある。

2. 日本語と同様に英語には書きことばと、話しことばの違いがある。今扱っている文がそのどちらであるかによって、用語や表現を選ぶ必要がある。生徒はこの点に無頓着でとかく会話文の中でも難しい単語を用いる傾向がある。やまとことばと漢語の違いを比較して説明するのは有効である。
3. 英作文においては生徒は全く予期しない表現をする事が多い。それが正しいのか間違っているのか、の判断を即座に下して批評や訂正を加えなければならない。これは英作文の授業の最も困難な点である。
従って教授者は平素の自己自身の知識の蓄積に加えて、授業前に、各種の表現の可能性を検討し、それに対する判断をつけておかなければならない。
4. 授業時には口頭表現の場合は、適宜適切に、又生徒が板書する場合には、それに対して、わかりやすく（出来れば白以外のチョークで）添削を加える。どの部分がどの部分にかわっているのか一見してわからないような添削をしないように注意しなければならない。
5. 生徒の表現した英語に対する批評は次のようなものが考えられる。
 - a) 文法的に、又は単語の綴り等が間違っている。
 - b) 文法的には間違っていないが英語の表現としては不適切である。
 - c) 意味は通ずるが何となくおかしい。
 - d) どちらの表現でもよい。
 - e) どちらの表現でもよいが、この方がより普通である。
6. 「正しい」表現と「間違っている」表現との境界をどこに定めるか、という事は教授者がしばしば迷う事である。これは判断の基準をどこに置くか、によってきまる事である。
「意味さえ通れば多少おかしい所があってもさしつかえない。」と考えるか「文法さえ正しければ英語としての妥当性には無頓着である」のか「文法的には正しくとも英語としておかしい文章はよくない」と考えるのか、この点は教授者の日頃の言語に対する考え方や英語そのものの把握の仕方により異って来る可能性がある。
7. しかしこの場合の良い基準の一つは日本語自身についてふり返って考えて見る事である。外国人が次のような日本語を使用した場合、我々はどうか考えるであろうか。
「天気が清朗である理由で、外部でひるごはんをしたための事にしたらいかがか」
「10時にAデパート前で集りをして、10時15分のバスで出て行こうか」
8. 生徒の陥る最も大きな弱点は和英辞典でさがし出した単語を文法でつなぎあわせて英文を作り出すが、その英語らしさの妥当性について無頓着なことである。
従って自分が書こうとする英文の基準は、日頃接する英文そのものの中にあるのだ、という考え方を生徒に定着させる必要がある。英文の暗唱は英作文上達の最良の方法である。
9. 生徒の表現した英文の訂正においてその生徒自身、又他の生徒に適宜質問を發して正しい表現を發見させて行くよう援助しなければならない事は当然である。
10. 間違いを含んだ文章をわざわざ声を出して読むのは意味のない事である。生徒が板書した英文は訂正前に読ませるのではなく、訂正後に読ませるようにしたい。
11. その他、和文英訳において留意すべき事柄に次のようなものがある。
 - a) 単語の置き換えで和文英訳が出来るという考えを出来るだけはやく打破しなければならない。
 - b) 難しい単語を用いる必要はない。書きことばの表現においても初歩、中級の場合は易しい単語の使用を勧めたい。例えば「地方」に対しては part でよく「旅行」に対しては trip 一語を知っていればよい。2000～3000語で殆どの事は表現できる。

- c) 現代文法を用いる。基本文法の正しさには特に留意する必要がある。生徒の文法上の弱점에留意し、それをたえず補強するように留意したい。
- d) 易しい文章は短かく書き、やたらに接続詞は用いない。I can't stop here. I'm in a hurry. (I can't stop here for I'm in a hurry. はよくない)
- e) 日本語に用いられるカタカナ英語は殆どすべて元の英語の意味と違っている事に注意したい。
- f) 「ねる」「おきる」「きる」「きている」「はやく」「乗る」国民名等、日本語は一語でも英語ではさらに概念の分析された語や表現が多い。これらは特に留意して理解させる必要がある。
- g) 「～している」は進行形、「～した」は過去、「～するだろう」は未来と単純に考えて置き換えたり、本はbookであってbooksである可能性については考えない生徒が多い。これは1a)に述べたような和文英訳には通用するが、その後次第に行き詰って来る。その日本語が何を意味しているかという意味内容を考えさせ、それによって英訳するように指導したい。又 see～は日本語では「～が見える」である。
- h) もっとも日本語は情況に依存した言語であるので、書かれている表現を見ただけでは意味の不明な事がよくある。「～さん」は男なのか女なのか、「本」は一冊なのか二冊以上なのか、「雪が降っている」は今降りつつあるのか、降りやんで雪が地面をおおっている状態なのか、等々判断のつかない事が多い。これは元の日本語を書いた人自身にとってはどちらでもよい事柄ではない筈であるが、短い英作文の問題として出て来た場合判断の仕様がないのである。従ってこのような両義性はいたし方ない事として処理するより他ない。
- i) ただし長文の日本語では文脈から上記の判断のつく場合があり、この場合には日本語そのものの意味の関係をよく読んで判断しなければならない。
- j) 英語国民の心理上、又習慣上の特異についても充分考慮しなければならない。What is your name? は文法的には正しくても普通用いるには種々の問題を含んでいる。
又英語の表現は簡潔で、論理的でなければならない。
- k) 我々が外国人として英語を使用する場合は、大人として、又最初は未知の人として相手に接して行くのであるから、j)の事も考慮して丁寧表現をよくわきまえ、その必要性を随時判断しそれに応じて使用できるようでなければならない。
12. 英語のすべての授業においてそうであるが、特に英作文の授業に多いのは生徒の英語の実際の用法を無視した質問である。文法の不十分な知識を元として、三段論法的に、こうしなければならないのではないか、と質問して来る事がある。これらの質問はそれ相当の理由があるから、その生徒がなぜそのような質問をするのかよく考える必要がある。しかし英語は慣用等現実の用法を元としている場合が多いので、単に言葉のやりとりではその生徒に対し解答を与えられるとは限らない。
理屈ではなく、これはこう言うのだ、その通り覚えなさい、と言わなければならない事が多く、これが言語教育の実際である。しかしその断定は教授者のいいかげんな言いのがれてあってはならず、日頃の学習と経験にもとづいた確信によっていなければならない。

E 英語教師の自己研修について

1. 教師は日頃から自分の教える学科について研究を積み重ねなければならない事は当然であるが、語学の場合においては、その知識の造詣の深さに加えて、その実際の運用力を磨かなければならない。
2. 英語学、英文法、英米文学、英米史に加えて、英語の他言語との関連、思想、宗教、西洋史を中心とする世界史、地理に関して豊かな常識を持っていなければならない事は言うまでもない。これに加えるに英米を中心とした欧米の生活の実際に関して多方面な読書によって知識を増すよう努めなければならない。この場合、過去の事情と現在の事情を混同しないように留意する必要がある。
3. 自分で旅行する事によってこれらの知識を確実なものにし、あわせて英語の訓練をする事が出来ればそれに越した事はない。この場合にも留意すべき事は、自分の見聞した一、二の事ですべてを判断してはならない事である。日本の事を考えて見れば一つの事にもいろいろな例外やバラエティがある事に気がつく筈である。又外国の事情に日本的規準をあてはめて主観的価値判断や短絡的速断をしないように注意しなければならない。
4. 英語の実際運用力を高める努力は不断に続けなければならない。
 - a) いろいろな内容の文章を速読できる能力。辞書にできるだけたよらないで文章を読み取る事ができなければならない。日本語も小説、新聞、論文、会話等によってそれぞれ文体が違う。同様に英語においても各種の文体に慣れると同時に、自分が用いる(書き、話す)英語もそれぞれの情況に合ったものでなければならない。
 - b) 書く能力。日本語からの置き換えや、直訳によったのでは先ず英語らしい英語にはならない事に留意しなければならない。日頃英文に接する時、その英文がどんな日本語(普通の日本語らしい日本語)に対応しているかに気を付けている事は、英語らしい英語の使用に大いに役立つであろう。

多読、音読、筆写、暗唱によって英語そのものを直接自分に取り入れるようとする努力が必要である。

しかし日本人が書く以上、100%完璧な英語は書ける筈がない、という事も事実であろう。問題は英米人が読んですぐ明確に理解できる文かどうか、という事である。このためには上記の訓練の外、英米人の発想と表現法を理解、修得するようにしなければならない。
 - c) 会話能力。会話は元来二人以上で成立するものである。特別な機会は別として、これを単独で練習するにはどうしたらよいか。これは各人の工夫、努力による外ないが、英会話に堪能な多くの人がこの事を行っている事も事実である。

英米人的な発想法と表現法の修得はb)の場合と同様大切である。それは先ず英米人によって書かれた会話の実例文、小説、劇の会話により修得できるであろう。

あいまいで多義に受け取り得る表現をしたり、完全な表現を避けて、暗示だけで相手にわかってもらおうとする態度は極力避けるべきである。つまり「必要にして充分な表現」という事を基礎的に重視しなければならない。

なお、ここで会話と言うのは日常のあいさつから、複雑な事柄についての話し合いまでに至る各種の事柄について話しあえる能力をさしている事は言うまでもない。
 - d) 発音の改善。発音に日本的なナマリがあってもさしつかえないのだ、と言うのは充分理解できる事である。しかしこれもb)の場合に述べたのと同様、自分の言う事が英米

人（日本在住のでない）にすぐ理解してもらえる範囲と言う事が前提である。

日本語の音節に還元しないで、英語の音節により発音する事、子音の発音を明確に強く行なう事等を心掛けなければならない。

- e) 以上のように英語に上達する事は知識の面と訓練の面とをあわせ持っている。「日本人なのだから所詮英語は上手にならない、又ならなくても当然だ、間違いだらけの英語で堂々と押し通せばよいのだ」という主張がある。「間違っただがいたしかたない」という事と「間違うのがよいのだ」という事を混同しないようにしなければならない。

しかし「努力してもやはり間違いを犯してしまう。間違っただからと言ってひどく自己を責める必要はないが、次からは少しでもその間違いをしないように改善して行こう」というのが正しい態度である事は言うまでもない。

又現在日本語をやる外国人は増えつつあるが、英語国民以外で英語をやる人達、フランス人以外でフランス語をやる人達の数に比べればごくわずかではない。又多くの国民が幼少の時から英語を学習して、成人となって比較的自由に英語を用いる人が多くても、その国民は決してその国民としての誇りやアイデンティティを失っていない。又その国語に多くの英語を借用する、というような事はなく、全く意志伝達、ひいては自国の発展のために英語を活用している事を知るべきであろう。

- f) 英語教師である、という事は日本の事、日本の歴史や文化について無知であってもよい、という事にはならない。日本文化を外国に伝える事ができるのは、先ず英語教師であるという自覚を持って自国の事をよく知るように努める事が大切である。